

インシャー史料におけるペルシア語モンゴル命令文について

(要 旨)

渡部良子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・ジュニアフェロー）

13-14世紀モンゴル支配時代、モンゴル帝国の文書行政の理念と形式はペルシア語による文書行政にも適用され、アラビア文字ペルシア語の伝統的文書様式とモンゴル命令文書式が混交した独自の文書様式の文書が発行された。そして、モンゴル支配期におけるペルシア語文書へのモンゴル命令文書式の浸透は、後代のペルシア語文書行政にも短期的・長期的に影響を与え、ペルシア語文書様式に独特の特徴を与えたということは、夙に知られている。

本プロジェクトは、イラン高原で発行されたモンゴル政権公文書(イル・ハン朝とその後継王朝)を、モンゴル命令文書式の影響という観点から蒐集・分析することを目的として活動している。モンゴル政権発給ペルシア語文書は、イラン北西部アルダビールのシャイフ・サフィー廟に残されたアルダビール文書群を中心に数十点の現文書が現存しているが、史書などの歴史文献にも写しや用例の形で少なからぬ文書が伝えられている。写し文書は史料的重要性は現文書に劣るが、現文書を補う情報を含んでいる、何をどのような形で写し・用例として残そうとしたかという点に注目することで、ペルシア語書記官僚達がモンゴル命令文書式をどのように理解していたかを理解する手がかりも与えるだろう。

本報告は、史料の中のペルシア語モンゴル命令文写しの調査の一環として、ペルシア語インシャー文献に収録されたモンゴル命令文書式を留める公文書用例と、これらの文献に残されたモンゴル命令文書式に関わる言説について、中間報告を行う。

インシャー(創造、作文)とは、書記官僚に文書起草の理念・技術を伝えることを主な目的として編纂された書簡・文書作成指南書・書簡用例集である。アッバース朝における官僚機構の複雑化とアラビア語書記術の発達に伴い盛んに編纂されるようになり、ペルシア語・トルコ語文章語と文書行政の発展によりそれぞれの言語にも移植され、独自の文学的ジャンルを形成した。13-14世紀には、『書記典範』*Dastūr al-Kātib*をはじめ複数のペルシア語インシャー文献が現存しているが、それらの作品には、モンゴル支配期以前のペルシア語文書行政の伝統を維持しつつ、新たに導入されたモンゴル命令文書式に注目し、その重要性を理解していたことが確認できる。本報告では、第一に、モンゴル命令文書式のインパクトがペルシア語世界にどのように表れ、文書行政へ影響を与えたか、同時代のペルシア語インシャー指南書や史書の写本を通して考察する。

第二に、インシャー文献に収録されたペルシア語文書の写しには、いかなるモンゴル命令文書式の影響が見いだせるか、イル・ハン朝初期の宰相として権勢を振るったShams al-Dīn al-Juwaynīとその一族の書簡集『ジュワイニー書簡集』を題材に考察する。書記官僚の模範となる文章を残すことを目的としたインシャー文献に収録された文書用例は伝統的なペルシア語美文で書かれたものが主であり、その文体はアルダビール文書群のような現文書の文体とは大きく乖離しているが、その文章構成や一部の表現には、モンゴル命令文書式が反映した変化が見て取れる。報告者は以前『書記典範』収録文書用例の文体に見られるモンゴル命令文の影響について発表を行ったが(2009年11月)、本報告ではそれを発展させ、モンゴル時代に多数流通した書簡集と考えられる『ジュワイニー書簡集』内のShams al-Dīn al-Juwaynī 発給公文書写しにどのような特徴が見いだしうるのかを検討する。